

卷 頭 言

皇紀二千六百年の榮ある年を迎へるとともに我が地歴學會誌も茲に三歳の年を重ね、今や逐次確乎たる基礎を固めつゝあることは我々同人の衷心から歡喜に堪へぬ處である。併し廣く眼を刮いて内外の情勢を観るに、我國が支那の涯地に破邪の戟を執つてより既に三星霜今尙ほ冥雲は全く拂去られるに至らず、更に歐羅巴の彼岸では客年以來強國の間に風雲を孕んで醸成された硝煙が天地に漲つて血腥く、戰亂の飛沫は遠く我が國人の袖をも濡らさず、に止まないものがあり、吾等一億皇民の奮起を煽立つること彌が上にも甚しい。此の秋に方り遠く文化の迹を辿つて其の進展すべき趨向を逆睹し、以て我が國運の發展に資せんとする歴史學、或は宇内の實情を研校して眞面目に故國を把握し、以て其の興隆を圖らんとする地理學の研鑽に携はる吾等同人が、肇國の大道に基いて駭々たる皇運を扶翼し奉るべき有爲の皇民を鍊成するため、課せられた任務は愈々至重を加へるに至つた。茲に於て余輩は敢て同人諸子の協力した必死の奮起を促して歇まない次第である。

會長 北 田 宏 藏